

戦争による建築への影響ー偽満州建築における日本建築の研究ー

1x10a186-0 呂喃

□研究背景

中国では清朝末（19世紀頃）、ロシアが満州地方(現東北三省:遼寧省、黒龍江省、吉林省)を侵略し、中国の政治経済を干渉し続けた。

1905年、満州で日露戦争が起こった。ロシアは敗戦し、日本は満州の管理権を取り、偽満州国¹を設立した。満州鉄道株式会社を政治の中心として、都市の建設事業を展開し始めた。1945年の日本敗戦までに、日本人による大量の建築が満州に建設された。以下、これらを満州建築と呼称する。

すでに、ロシアの建築家たちは防寒に優れたロシア式の建築を中国に建設しており、日本人建築家は、これらのロシア式の建築を参考に、自国の建築技術を持ち込んで数多くの満州建築を建設してきた。これらの満州建築は現在でも、中国の都市・建築に深く影響している。

1. 偽満州国:又は、旧満州国。「偽満州国」は中国で普遍的な呼び方で、筆者は中国人の視点で本論を述べるため、偽満州国と称する。

□研究目的

遼寧省大連の町を歩きながら、現代的な高層建築の中にいくつもの満州建築を発見した。独特の意匠性と歴史性に感動した。これらの、現代都市に残存している歴史的建築は大変興味深い。今日に至るまで残ってきた歴史に注目し、満州建築の歴史的な価値を評価していく。

□研究方法：

本論では各国の資料を踏まえて、戦前、戦時、戦後の順序で、戦争が満州建築へ与えた影響を検討する。

満州の重要な都市である大連を主な研究対象とし、大連市に現存する満州建築について成立の背景と技術を分析したうえで、戦前の満州の建築と比較を行う。さらに現存の満州建築の状況を加え、客観的に戦争がもたらした影響を考察して行く。

□第1章 戦前の満州建築

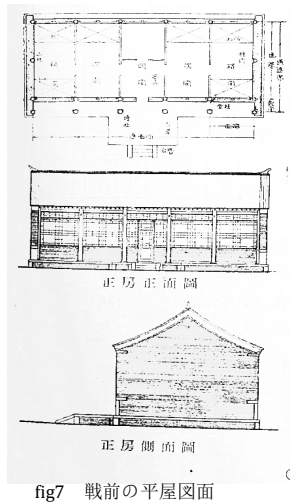


fig7 戦前の平屋図面

満州の気候は厳寒、乾燥な特徴がある。昔、遊牧民族は満州の平原で生活していた。清朝の初めに、満州の奉天（現瀋陽）は首都に選定されて、都市をつくった。気候と環境状況によって、農業が発達し、自給自足の村が点在していた。『満州建築概説』（参照資料1より）

における在来建築の記録によると、昔の民家は住む人の経済状況により、1～8棟ぐらいの平屋を分棟で建てて、四角い庭を囲んだ、四合院が建てられた。建物の構造は基壇の上に木材の柱と梁を組み、壁は主に土と黒煉瓦である。屋根と窓の枠の材料は木材が一般的である。

□第2章 戦争中の建築活動

日本に占領される前の大連はロシアの支配下において、ロシア人によって都市が計画・建設された。日露戦争（1914-1915）後に、日本が満州の管理権を取り、満州における都市の建設を始めた。

ロシア人は東支鉄道を満州に付設し、そして、鉄道附属建物を建設していた。ロシア敗戦後、日本は満州で満州鉄道株式会社を設立した。満州鉄道株式会社は東支鉄道を引き継いで管理し、それを始点として、日本人はハルピン、長春、奉天、安東、大連などの都市の建設を始めた。（参照資料1より）

□第3章 戦時に建てた新しい大連

都市計画

戦時中大連は、重要な軍事都市であった。日露戦後に大連は環境と交通の便利で日本人の名士、士官とその家族に目をかけられて、首都と同じように重視された都市である。そのため、日本人は大連の都市の建設に注力した。

元は漁村であった大連に、ロシア人は通商のための埠頭を開発するために、鉄道を付設した。そして、市民の国籍により、厳しい階級を定め、活動範囲を分けて都市を計画した。ロシア人が大連を殖民地とした6年間に鉄道施設と金融機関、商店、住宅などを建設して、大連を漁村から都市に発展させた。

その後、日本人による殖民地時代は、ロシアより更に長い40年間にのぼり、さらに完備な都市建設を行った。大量の日本人が大連に移住してきた。満州鉄道株式会社は大連に在住する日本人に日本国内と同じ程度の生活環境を提供するため、学校、新聞社、病院、呉服店などの公共施設を建設した。

満鉄病院（1925年）

1925年竣工で、設計と施工はフラー会社、地下1階、地上4階、延べ面積は合計9万平米の建物である。まずは医療施設について、当時北京には有名な協和医院があり、満鉄は大連にも同等の機能を持つ病院を計画を始めた。それが、満鉄病院である。アメリカのフラー建設会社と共同し、アメリカのコンクリート装置を導入した。当時の先端の病院建築であった。（参照資料2より）

大連市第二中学校（1926年）

1926年に竣工、設計は甘利哲郎、地下一階、地上2階の建物である。戦時に日本士官の家族も満州に移住し、満鉄は子供のために教育を提供することを重視した。そのため、日本人向けの学校を開設した。その中に今も残された大連第二中学校がある。大連第二中学校は、行政中心地とは離れた、日本人の生活地域に建設された。この建設には、工事費に170000円の資金が投入された。以下に紹介する呉服店の二倍である。（参照資料2より）

大連三越呉服店（1927年）

1927年に竣工、設計は宗像建築事務所で、地下一階地上3階の建物のである。生活の品質を重視する日本人は多くの商店を建てた。大連に建てられた三越呉服店の支店は、3階の建規模であった。当時の満州にとって、贅沢な商店だと考えられる。

大連新聞社（1924年）

1924年に竣工、設計は小林多吉地上は3階、地下は1階の建物である。大連は満州国における重要な戦争拠点であり、戦時の情報は大連新聞から全国へ公布するので、大連新聞社は戦時の情報中心とは言える。

これらの建物から、戦時に日本人は富裕な生活を過ごしていることが分かった。日本人は西洋建築の技術と進歩な教育、医療、メディア、娯楽の方式を満州に持ってきた。

□第4章 戦争は満州に与えた影響

都市計画の踏襲

大連の今の衛星写真と日本による殖民地時代の都市計画図を比較すると、戦時中の都市の形が残っている。東側はロシア人が計画した、パリの都市に類似した放射状の街路と、西側に日本人が計画した格子状の町がはっきり見える。（fig. 6, 7図）戦後から今まで70年間が経過し、街の風景はすでに高層建築が並ぶものに変わったが、街の形は先行形態¹として、戦時のままにずっと残っていることが明らかである。

また全満州まで広げてみると、今の東北三省の鉄道は、いまだ戦時の満州鉄道の形がはっきり踏襲されていることも明らかである。

1. 中谷礼仁「場所と空間 先行形態論」（岩波書店、2005）より

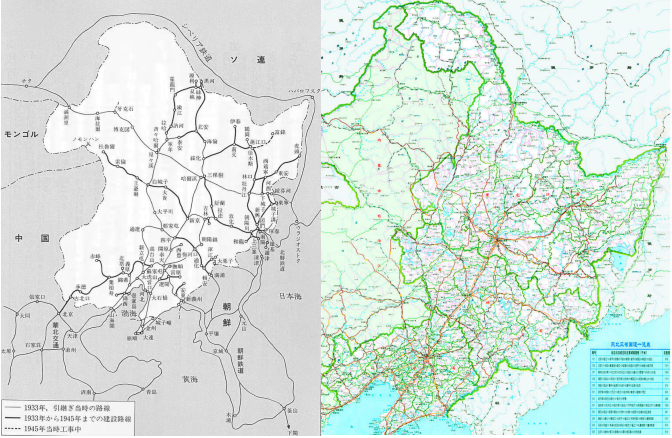


fig2戦時の満州の鉄道図

fig3 2007年の東北三省の鉄道図

西洋建築の普及と中国伝統建築の衰退

構造、材料

戦前の満州は平屋の民家で村が構成されていた。戦時中から、多層建築が導入され、建築の規模は大きくなった。今の満州には、戦時と同様に大規模の集合住宅が都市の中に並んでいる。

昔の平屋の基礎は、地面に30cm厚さの石を積んで基壇をつくり、その上に柱と壁を作る。このような弱い基礎では多層建築が建てられない。戦時から基礎の工法と鉄筋コンクリートの技術を移入し、高層建築が可能となった。

装飾

戦時のロシア人と日本人の建設により、満州に西洋建築の意匠の特徴が持ち込まれた。例えば、西澤泰彦氏は『植民地建築紀行』に旧天豊源雑貨店について、「バロック建築によく見られる手法である。しかし、その円柱は、禅宗様建築に見られる基盤のような球の上に立ち、柱身の溝彫が螺旋状によじ昇り、柱頭には植物の葉がついている。この葉がアカンサスの葉なら、

西洋建築にかなり近い意匠なのだが、どう見てもアカンサスに見えず、むしろ、白菜に近い。」と記載している。天豊源雑貨店は当時の中国の名士が大金を掛けて、贅沢な建物を建設した。ここに記載している螺旋状の柱と柱頭の白菜はバロック柱ではなく、中国の盤龍柱に近い。天豊源雑貨店の装飾は、中国伝統建築とバロック建築を融合したものだと考えられる。



fig4 天豊源雑貨店の柱



fig5 中国の盤龍柱

□第5章 結論

日中戦争により、ロシアや日本の建築技術が中国に持ち込まれた。現在の満州の建築・都市は、戦争でもちこまれた技術の延長に成立している。本論では、当時の技術や建設の背景を評価すべく、分析・考察を行なった。満州建築の新たな技術・意匠の中には、中国在来の建築的特徴を引き継いだものも認められた。



fig6

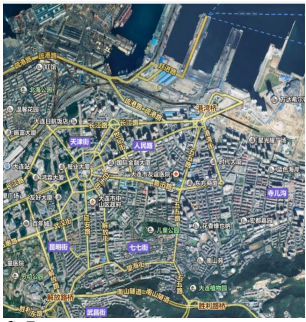


fig7

謝辞

本研究にてお世話になりました中川先生、中谷先生、また中谷研究室の皆様へ、厚く御礼申し上げます。

注釈
参照一次資料1.『満州建築概説』（建築学会新京支部編 1939.10）
2.『満州建築雑誌』（満州建築協会 1926-1944）
参考文献1.莫畏、侯幼彬、張成龍 <長春偽満洲国“新京”建筑様式>《新建筑》より(新建築,2007)
2.李之吉 <“満洲式”建筑解析>張复合《中国近代建筑研 究与保護・三》より(北京:清華大学出版社,2004)
3.張俊峰,杜俐 <長春“満洲式”建筑遺存述論>《建筑与文 化》より（建筑与文化,2010,6)4.「豆城—長春」《建筑百家談古論今—地域篇》(中 国建筑工程出版社 2007.01)より
5.「模 仿的誤区—偽満州時期建筑的誤説」(《時代建築》2007 年第 6 期)より
6.「尊重歴史保護遺產》《一座城市的經典記憶—長春 城市计划建設60 年》(長春出版社 2009.10)より
7.越泽明《旧満洲国首都规划》(社会科学文献出版社,2011.8.1)
8.西澤泰彦『海を渡った日本人建築家:20世紀前半の中 国東北地方における建築活動』(彰国社,1996.12)
9.『図説「満洲」都市物語：ハルビン・大連・瀋陽・長春』(河出書房新社,2006.5)
10.『図説大連都市物語』(河出書房新社,1999)
11.『日本植民地建築論』（名古屋大学出版会,2008）
12.『日本の植民地建築帝国建築かれたネットワーク』（河出 書房新社,2009)
13.『植民地建築紀行 満洲・朝鮮・台湾を歩く』（吉川弘 文館,2011)
14..『東アジアの日本人建築家 世紀末から日中戦争』（柏書房,2011）
・満鉄建築会
15.『満鉄の建築技術人』(満鉄建築会,1976.12)
16本田康喜『満州土木建築発達史』
17.山崎盛一郎『満州展望』（大阪屋号书店 1934）
・18.『大連文物要覧』（大連市文化広播影視局 2009.10）
図版出典
fig1『満州建築概説』（建築学会新京支部編 1939.10）
P 15
fig2 1. 天野博之『満鉄を知るための十二章』（吉川弘文館 2009.3.20）
fig3『東北三省鉄道図冊』（中国教育出版社2007
fig4http://image.baidu.com/i? ct=503316480&z=&tn=baiduimagedetail&ipn=d&word=中华巴洛克2010より
fig5www.baidu.com2012より
fig6中国大連檔案館より提供された資料fig7www.baidu.com百度地図2013より